改巻に際して

森　為　三

兵庫県生物学会は終戦后の昭和22年6月明石に於て創立総会を開いて発足した。それで会の事業として各種の講習会や採集会を開くと共に、会誌として「兵庫生物」を発行することになり、昭和23年3月1日に第1巻第1号を発刊した。創刊号は貧弱で29ページ執筆者10名に過ぎなかつた。しかし当時は印刷用紙も窮屈な統制下におかれ、資材も不足の時であつたから、これを発行するためには編集幹事各位の絶大な苦労があつたのである。それが号を重ねるとともに、用紙の入手も楽になり印刷技術も進み、それに会員各位の研究調査及び発表意欲も旺盛となり、改号毎に執筆者及び論文数それにともないページ数も増加し、昭和26年1月発行の第5号までで満3か年、冊数にして5冊、ページ数は159ページ、執筆者は39名論文は63篇に及んでいる。それで昭和27年1月に巻を改めて第2巻を発行することになり、巻頭に紅谷理事長の巻頭の辞を入れ発足した。第2巻は第1巻に比し一層充実したものになり、殊に本県生物学会の功労者、阿部・田代・山鳥・矢倉4先生の追悼号を出版したことは意義あることであつた。第2巻は昭和29年3月発行4号5号合冊のものを以て終りとし、満3か年冊数にして4冊、ページ数にして266ページ、執筆者44名、論文78篇となる。これらの論文を見るに、本県の生物を対象とした真摯な研究調査報告が多く、本県の生物教育の進歩発展に資するところ多大なるを信ずるものである。また本会の事業として、毎年施行している各種の講習会、臨海実習、採集会等も毎回超満員の盛況にして、講師各位も熱心に指導され、これまた多大の成果をおさめている。また本会は「生物実験ノート」及び「生物入試問題集」を発行し、生物入試問題懇談会を開いて、大学と高等学校との間の生物教育の緊密なる連絡をはかり、理科教育の充実進展に資している次第である。会員数は創立当初は160名であつたものが現在は600名に達している。なお毎年開催する総会も盛会にして会の1年間の事務報告とともに、会員各位の研究発表があり、著名の学者の講演や映画、幻燈や標本の展示などの催しをなし、時には翌日見学または採集会をなすことがある。本年5月21日、西宮で第9回総会を開いたが、出席者300名を超え、とくに盛会であつた。来年は5月頃但馬の城崎か豊岡で第10回総会を開く予定で、但馬の会員が熱心にプランをたてて居られるので、多数の会員各位の御来会を希望する。

かくの如く本会は年を遂うて隆盛になりつつあることは慶賀の至りに堪えない。普通はかかる種の地方の学会やその出している雑誌は、竜頭蛇尾に終るものが多いのであるが、本学会は機関誌「兵庫生物」とともに益々増大進展しつつあることは、会員各位の一致協力と役員諸賢の終始一貫献身的努力の賜物と信じ、心から謝意を表する次第である。今回は第3巻を発行することになつたのであるが、家でも第3代目がその家の興発の岐路になるとも云われ、徳川幕府は三代将軍家光が英傑な人物であつたが為めに、15代まで将軍が続いたと記されている。第3巻は会員各位の一層の御努力御研究調査により傑出した研究調査報告が満載され、誌上に華をさかせて頂きたいものである。また本会の事業も会員各位とくに役員諸賢の御活躍御配慮によつて各方面に発展し、もつて兵庫県生物学会の基礎が確固不抜のものとなり、永遠に継続し繁栄せんことを期待してやまない。かくしてこれらの努力や事業が兵庫県の理科教育に対し多大の貢献するものであると信ずるのである。

(p. 3から)

により洲本で開催の理科校外指導研究会に講師として出席されたるにより、同博士は文部省の天然記念物調査委員であられるので洲本のセンダンの巨樹を見て頂く好機を得た。本夏8月29日研究会で御講演の後、洲本市教委武川社会教育課長、灘高校川崎先生、柳学園山西先生と私とで案内し、雨中を視察して頂いた。本田博士は私が上記に述べた徳島県の鍛冶屋原のセンダンの巨樹は枯損したので指定を解除し、その近くの幼稚園内に同じ位の太さのセンダンがあつたので指定したと、また先年中井猛之進博士は山口県のセンダンを調査し指定しているが何れも本樹より遙かに細くしたがつて本樹はセンダンの巨樹として日本一のものならん、文化財保護委員会にかけるとのことであつたので追記する。